

〈中〉とは何か

私たちの日常生活を支配する〈中〉へのこだわり。〈二つのものの中間〉と〈的中・適宜〉という二つの意味に注目して、これからの生き方を考える。

I 二つの〈中〉——論理と道徳

○「論理」における〈中〉

- ・排中律と容中律 →①
- ・論理の無力——現実は〈上・中・下〉の三層構造

○道徳における〈中〉

- ・〈中〉の根本理念 →②
- ・〈中〉の核心は、「的中」すること、適宜なること →③

II 階層としての〈中〉

○「高度経済成長」の帰結——「一億総中流」時代

- ・〈上昇志向〉の限界——「下流化」 →④

○「中流」願望はどこに行き着くか？

Q. 〈中〉本来の価値をいかに具体化するか？

[資料]

① 〈中〉の論理

「中とはただ二つのものの中にあることをではなく、それが二つのものの孰れでもなく、それ故にそれらの孰れでもあり得ることを意味する」(山内得立『新しい道德の問題点』理想社、1958年、73-4頁)。

② 儒教における〈中〉

「喜怒哀樂の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆節に中る、これを和と謂う。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、万物育す」(『中庸』第一章、宇野哲人訳注、講談社学術文庫、1983年、53-4頁)。

③ 「的中」すること・適宜なること

「それ故に中には三つの意味が区別せらるべきであろう。一、外に対して内を意味する、二、内外に亘って二つのものの中にあることを意味する、三、二つのものの中ではなくして、何らかの一つのものに的中することを意味する。そして恐らくはこの第三の意味が中の最も正しい意味であるであろう」と(『新しい道德の問題点』79頁)。

「中の質的なるものは中^{アタ}るということである。的中することである、適宜なることである。中は義であり義は宜でなければならない」(同書90頁)。

④ 「下流化」の実態

「団塊ジュニアは日本の社会が中流社会になってから生まれた初めての世代だ。だから団塊ジュニア以降の世代は著しい貧富の差を見たことがないまま育った。……だから、「下」から「中」へ上昇しようという意欲が根本的に低い。〈中の中〉から「中の上」へという上昇志向も弱い。……社会全体が上昇気流に乗っているときは、個人に上昇意欲がなくても、知らぬ間に上昇できた。しかし、社会全体が上昇をやめたら、上昇する意欲と能力を持つ者だけが上昇し、それがない者は下降していく」(三浦 展『下流社会——新たな階層集団の出現』光文社新書、2005年、7-9頁)。

[概要]

全体のテーマを《〈中〉の迷宮》とした。きっかけは、前回の「哲学対話」で、現代社会を「平均」によって特徴づける山口さんの意見を聴き、私自身の関心とつながるものを感じたこと。〈中〉の迷宮——〈中〉には、肯定的(ex.「中流」)と否定的(ex.「中途半端」)いずれのニュアンスもあり、ハッキリしないまま使用されている。哲学の論理(排中律)では〈中〉が排除されているにもかかわらず、われわれの意識は〈中〉に支配されている。1の「講話」では、学問と生活にわたる〈中〉の意味を、それぞれの水準で明らかにし、②の「対話」での議論につなぎたい。

I 二つの〈中〉——論理と道徳

論理の世界では、肯定か否定か、そのいずれかであって、中間はない。そういう二値論理に立つ「排中律」を逆転した山内得立の「中の論理」(容中律)。→①

論理に〈中〉の境域を導入した山内の功績は偉大。だが、そういう論理的アプローチでは、日常生活に占める〈中〉の重要性が表現されない。論理よりも生活にとって身近な〈中〉の意味を追究したのが、儒教、特に四書の一つ『中庸』である。第一章の有名な一節。→② 山内の解釈では、二者の「中間」よりも、物事への「的中」という意味が根本的である。→③

このようなきわめて意義深い解釈にもかかわらず、山内は儒教の「中庸」概念を、彼の目から見て、「中の論理」に該当しないものとする。理由は、それが「単なる道徳的教説」にすぎず、「論理」としての要件を満たさないから。〈中〉の道徳が、論理よりも低い取り扱いを受けたことは、残念の一語。私としては、〈中〉を学問と生活との〈あいだ〉に正当に位置づけるべく、『〈中〉のロゴス』を世に問いたい。

II 階層としての〈中〉

私たちにとっての〈中〉は、多くの場合、「中流」の階層意識という形で現れる。三浦展『下流社会——新たな階層集団の出現』は、20世紀初めごろの若者集団——「世代」単位——における階層意識が、それまでの中流から下流に移りつつある現実を、豊富な調査データを駆使して実証している。「中流社会」の「下流社会」化。その要因は、歴史的に次のとおり。

高度経済成長による「豊かな社会」の実現。社会全体に豊かさがいきわたり、「一億総中流化」の到来。しかし、「格差社会」の中で、〈中→上〉〈下→中〉のモチベーションは低下し、上昇する意欲を失ったまま、「下流化」が進展する。→④

相対化される〈上・中・下〉の区別ではなく、〈中〉本来の価値をうちたてたい。
→Q. 〈中〉の価値をいかに具体化するか？